

賢治作品における自己犠牲 : グスコンブドリから グスコブドリへ

著者	牧野 静
著者別名	Makino Shizuka
雑誌名	倫理学
号	31
ページ	77-91
発行年	2015-03-20
その他のタイトル	Self-Sacrifice in Kenji's Literary Works : Gusukon Budori to Gusuko Budori
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126238

賢治作品における自己犠牲

―グスコンブドリからグスコープドリへ―

牧野 静

序

宮沢賢治（一八九六―一九三三）の童話には自己犠牲をテーマにしたものが複数存在する。代表作と目されることも多い『銀河鉄道の夜』における主人公ジョバンニの台詞には「僕はもう（中略）ほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。」「一一・一六七」というものがある。この物語には川に落ちた級友を助けようとして溺死したカムパネラなど、自らの命を賭して他者の命を救うことを選んだ死者が複数登場する。ジョバンニは彼らと共に銀河を走る鉄道で旅をするうちに、先述の決意を抱くに至るのである。また賢治が没する前年である一九三二年に発表した『グスコープドリの伝記』という物語も、冷害による飢饉から皆を守る為に主人公ブドリが命を落とすというものである。

本稿は賢治が最晩年に手掛けたものであり、数少ない生前発表作品でもある『グスコープドリの伝記』と、その先駆形である未発表作品の『グスコープドリの伝記』の二作品を比較・検討することで、賢治が自己犠牲を扱う創作においてあらわした最終的な

境地を明らかにすることを目的とする。その際非常に重要な問題となるのが賢治の信仰の問題である。賢治が「雨ニモマケズ」を書き付けていた手帳には「塚メニヨリ／法華文学ノ創作」「一一・一六七」と記されているページがある。これは後述するように賢治が国柱会⁽¹⁾入会后、幹部の高知尾智耀と面会した際のやりとりを指すものである。賢治にとって創作と信仰とは非常に密接なものなのである。その為本稿では年譜や書簡を用いて伝記的事実を適宜検証し、また触れていたと思われる経典や言説等を照らし合わせるという手法をとる。

一、賢治の信仰

賢治の創作と信仰の関係を探るにあたり、はじめに賢治の生涯の信仰の軌跡を追っておく必要がある。その為まず賢治が生家の浄土真宗の濃密な信仰の中に育ったのち、日蓮主義を掲げる入会に至る経緯を追う。

宮沢賢治は一八九六年、岩手県稗貫郡里川口村（現花巻市）で生を受けた。賢治の生家である宮沢家は浄土真宗の篤信であり、

日常生活が仏教で規制されているといつてよい程であったという。そのような生育環境はそのまま賢治の初期の信仰の形成の源であっただろう。賢治は一九二二年一月三日付父政次郎宛の書簡で以下のように表明している。

小生は既に道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候 「一五・一六」

なお、ここで挙げられている歎異抄の第一頁とは歎異抄第一条を指すと思われる。以下にそれを引用する。

一、「弥陀の誓願不思議にたすけられ参らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思ひたつころのおこる時、すなはち、撰取不捨の利益にあづけしめ給ふなり。弥陀の本願には、老少・善悪の人をえられず。ただ、信心を要とすと知るべし。そのゆゑは、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。(後略)」⁽²⁾

ここでは弥陀の誓願によって罪深く煩惱の燃える衆生が救われるということが述べられている。この部分を引いて全信仰とまで言い切った賢治は、衆生の罪深さとその救済とを強く意識していたといえるだろう。それらが強く意識されるようになったのは、

このように浄土真宗の濃密な信仰に包まれて育ったことに由来する。しかしそれ以外にも賢治を衆生救済へと駆り立ててやまない端緒として、宮沢家が質屋・古着屋を営んでいたことを挙げることが出来る。近隣の貧しい農民を搾取することで成り立っている家業に賢治はいたたまれなさを感じ、彼らの姿に心を痛めていたようである⁽³⁾。後年賢治は彼らの暮らしぶりの改善を願うようになる。そして一九二一年二月から一九二六年三月まで稗貫郡立稗貫農学校教諭として勤め、更により直接的に尽力する為に職を辞し、一九二七年八月から翌年三月迄私塾である羅須地人協会を主催し、また無料の肥料相談を受け付ける等の行動を取る。

衆生救済への強い使命感は、おそらくこの罪業意識と表裏一体である。賢治はその臨終の前日まで病身をおして近隣の農民の肥料相談に乗っていた。このエピソードはその命が尽きるまで他者への尽力を惜しまなかつた彼の性格を非常に端的にあらわすものだろう。そしてこのような姿勢は創作上においてもあらわされている。先に挙げた『銀河鉄道の夜』におけるジョバンニの台詞や、『グスコープドリの伝記』における主人公ブドリの造形などがその反映といえる。

以上述べたように衆生救済、つまり皆をどのように救うかということは賢治にとつて実生活での実践においても生涯のテーマであったといえる。それが最晩年には病身を省みない自己犠牲的な奉仕活動の実践へと結び付き、また創作上にもあらわされるの

である。

その賢治が初めて法華經に触れるのは一九一四年九月頃である。このとき賢治は父政次郎の法友である高橋勘太郎から送られてきた島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華經』を読んで「異常な」感動を受けたとされている。賢治が法華經に心酔した理由として、吳善華は以下のように指摘している。

法華經は、釈尊入滅後の衆生・一切衆生のために説かれたのであり、「一切衆生の為」というところに法華經の慈悲が込められている。つまり法華經は、民衆の為の慈悲の經典なのである。(中略)また法華經は、人々の真の幸福のために、利益のために、安樂のために説かれたのである。誰もが等しく成仏の可能性を持ち、誰もが必ず絶対の幸福境界を満喫していける、これが法華經の教えなのである。⁽⁴⁾

以前から衆生救済にたいする意識が素地を形成していたゆえに、賢治は法華經の万人の幸福を謳う性格へコミットしたのである。そして賢治は一九二〇年に国柱会に入会し、翌一九二一年には突如出奔・上京し鷲谷の国柱会館を訪ねている。法華經に感動したことが改宗への端緒であることは疑いようがない。しかし法華經を受持するにも新興の国柱会を選んだ理由は一体何だったのだろうか。

国柱会は強い対社会意識を持ち、救らい事業や低費医療機関師子王医院の設立等実際に社会事業を展開していたことを上田哲が指摘している⁽⁵⁾。先の節で検討したように賢治は衆生救済を志向し、具体的な行動実践者としての顔を持つ。それを踏まえると、賢治が国柱会のこのような性格に強く惹かれた可能性は高い。実際に賢治が関東大震災発生後に国柱会を通じて多額の義捐金を送付するというかたちで国柱会の社会事業に加わっていることも上田は指摘している⁽⁶⁾。その他改宗の理由として、浄土真宗への不満や父への反発等、複合的な要因があった可能性が考えられるが、本稿では紙幅の都合上、先の推測を挙げるに留める。

以上概観したように、賢治が生家の浄土真宗から法華經との邂逅を経て国柱会入会へと至る軌跡には衆生救済という一貫した志向を見出すことが出来るのである。

次節では国柱会に入会によって、信仰と創作とが結びついた可能性を指摘する。

二、田中智学の芸術観と賢治の「法華文学」

この節では田中智学の芸術観と賢治が志向した「法華文学」の比較を行い、賢治が創作においてあらわそうとした信仰のかたちを探る。

賢治の国柱会への、より正確には主権の田中智学への傾倒は熱

烈なものであった。証左として以下に一九二〇年二月二日付保阪嘉内宛書簡である。その書簡を以下に引用する。

今度私は

国柱会信仰部に入会致しました。即ち最早私の身命は

日蓮聖人の御物です。従って今や私は

田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。謹んで此事を

御知らせ致し 恭しくあなたの御帰正を祈り奉ります。〔一

五・一九五〕

このように烈しい傾倒を表明していた賢治は、入会の翌年である一九二二年一月二三日に突如出奔・上京し、鶯谷の国柱会館に直行する。その時応対した幹部の高知尾智耀に告げられたことが、賢治の中で創作と信仰とを結びつけたようである。以下に高知尾の回想を引用する。

純正日蓮主義の信仰について語った時、私は平素、恩師田中智学先生から教えられている通り、今日における日蓮主義の在り方は、ソロバンを取るものは、そのソロバンの上に、鋤鋤をとるものは、その鋤鋤の上に、ペンをとるものは、そのペンのさきに、信仰の生きた働きが現れてゆかねばならぬ云々とお話をしたと思う。賢治は詩歌文学を得意とするとい

うのであるから、その詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようであればならぬとお話をしたが、それが「高知尾師ノ奨メニヨリ法華文学ノ創作」⁽⁷⁾に志したのではなかるうか⁽⁸⁾。

中学時代から短歌を創作し、一九一八年頃からは自作の童話を弟や妹に語ってきかせる等の旺盛な創作欲を持っていた賢治にとって、高知尾のこの言葉はその創作意欲を信仰と結びつけ、力強く後押しするものに聞こえただろう。そしてここで高知尾が告げたことは田中智学の主張を踏まえたものである。その田中智学講述の『日蓮主義教学大観』第一巻には以下のようなくだりがある。

(前略) 大文人大詩人が出ても、その作物が世間救済と相聞せず、本化の法と没交渉であつたならば、何の役にも立たぬ、反故同様である、一分時もそんな修養の爲めに貴重な時間を費やす必要はない(傍線部筆者)⁽⁹⁾。

ここで智学という「世間救済」が、賢治がそれ以前から抱いていた衆生救済の意識と結び付いたとしても何ら不思議はない。実際に賢治は高知尾との邂逅以降一ヶ月に三千枚とも云われるペースで猛烈に創作に励んでいく。

先の節で概観したとと合わせると、賢治が浄土真宗の篤信の家生まれ、のち法華経に出会い改宗して国柱会入会に至る軌跡には、衆生救済への使命感から世間救済への一貫した軸があり、更にそれが創作と結びついたことが明らかとなるのである。

賢治の創作には教化を念頭に置いていたと思われるものが複数存在する。例えば殺生戒を扱うものとして、一九二〇年頃に構想した『フランドン農学校の豚』や一九二三年に初稿が成立した『ビヂテリアン大祭』を挙げることが出来る。前者は屠殺される運命に苦悩する豚の姿を、後者は仏教的輪廻観を持ち菜食主義を主張する主人公を描いている。これらは殺生のむごたらしさを訴え、またそれを回避する手段として菜食を提示しようと試みたものである。換言するならば智学の教化芸術にコミットした上で殺生戒に纏わる規範を提示し、その順守を呼びかけるものとして執筆されたと推測出来るのである。

しかし賢治が意図した衆生救済は、最晩年には田中智学が主張するものとは質を異にするようである。先の「奨メニヨリ法華文芸ノ創作」が書き付けられていた手帳が使用されていた年代は一九三一年一〇月から一九三二年末、もしくは一九三二年初めまでであることが特定されており、それゆえこの手帳は一九三三年九月二日に病没した賢治が最晩年に書き遺したもののうちのひとつであるということが出来る。この手帳には以下のような下りが存在する。

筆ヲトルヤマズ道場観

奉謂フ行ヒ所縁

仏意ニ従フヲ念ジ

然ル後ニ全力之

ニ従フベシ

断ジテ教化ノ考タルベカラズ！

タゞ純真ニ

法楽スベシ。

タノム所オノレガ小才ニ

非レ。タゞ諸仏菩薩

ノ冥助ニヨレ。(傍線部筆者) 【一三・五六五】

「筆ヲトルヤマズ道場観」以降五行が国柱会独自の修行法を踏まえた表現であることは森山一によって指摘されている⁽¹⁰⁾。ここから賢治が最晩年になっても国柱会を信奉していたことが読み取れる。しかし賢治にとって執筆は純粹な信仰のあらわれであり、かつそれは教化を志向するものではないという。先に挙げたように田中智学の芸術観は芸術を教化の方便、布教・宣伝の具とする教化芸術に集約される為、賢治は芸術観については智学を真つ向から否定するようになったといえる。次節では賢治が教化を否定するに至った背景を探る。

三、実生活での苦悩と創作

賢治は何故教化を否定するに至ったのか。それを知る手掛かりのひとつは賢治の実生活上での苦悩であろう。父政次郎の改宗を願っても叶わなかったことや、法華経を読み国柱会へ入会するよう懇願し続けた親友保阪嘉内との決別を経験し、賢治はおそらく人々に自分と同じ信仰を望むことの困難を知ったと推察される。更に賢治は一九二二年に妹トシを喪う。この際の痛烈な悲しみは信仰不安を伴う程のものであったことが一九二四年に自費出版された『春と修羅 第一集』において表白されている。更にトシの死の翌年である一九二三年には関東大震災が発生している。賢治がこのとき国柱会を通じて多額の義捐金を送付しているのは先に指摘したとおりだが、これもおそらく強い使命感に駆られることであつたと思われる。一九二六年に賢治は教師の職を辞し農村での実践的奉仕活動に入るが、農民たちから金持ちの道楽だと蔑まれ、拒まれ続ける。その苦悩は一九二四から一九二六年にかけて執筆された生前未発表の『春と修羅 第二集』に綴られている。

賢治が創作において教化を志向しなくなった明確な転換点として、一九二二年から一九二三年にかけて執筆された『ひかりの素足』という童話を挙げる事が出来る。法華信仰に基づいて死

者の追善を行うことにより、死者は天上に召され残された者もそれを受け入れる事が出来るという筋書の、非常に教示的な童話である。しかし賢治はこの童話を「恐らくは不可」の書き込みを添えて未発表のまま放置した。それはおそらく先に触れたように、賢治自身が信仰によってトシの死を乗り越えることがかなわなかったゆえであろう。

留意すべきは賢治がトシの死にまつわる苦悩を、自身の信仰が未だ不十分なゆえだと捉え、より信仰を深める契機としたことである。

一九二三年の一二月に、賢治は童話のようなものを近隣の家々に無記名で投函する。これは妹ポーセと死別した少年チユンセに關して「あるひと」が言葉を紡ぎ、その人物の言いつけによってそれを執筆者である賢治が手紙にしたためた、という形式をとっている。妹ポーセがトシを、兄チユンセが賢治をモデルにしているのが明白な短編である。通称「手紙四」とされるこの物語から、以下に「あるひと」の台詞の一部を引用する。

チユンセはポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなことでも、また、はただけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹果をたべてゐるひとでも、また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがひのきやうだいなのだ

から。チユンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇氣を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマブフンダリカサストラといふものである。チユンセがもし勇氣のあるほんたうの男の子ならなせまつしぐらにそれに向つて進まないか。〔二一・三三〇〜三三二〕

この物語はトシの死に際し信仰不安に陥つた賢治が、トシのみを祈ることを自らに戒め、自身の信仰をより確かなものとする決意表明として配布されたのであろう。

賢治にとって信仰とは幼少期から意識された衆生救済、すなわち「すべてのいきもののほんたうの幸福」を希求することであつた。トシのみではなく、すべてのいきもの、つまり衆生救済をより強く希求するべきだといふ必然が、ここに見出されている。

次節ではその決意ののちに執筆された『銀河鉄道の夜』を考察し、賢治が希求しようとしたものが自己犠牲の描写を伴うに至る過程を追う。

四、『銀河鉄道の夜』とその破綻

先の「手紙四」をあらわしたのとほぼ同時期に、賢治は『銀河鉄道の夜』の執筆を始める。この物語のおおまかなあらすじは、

孤独な少年ジョバンニが級友カムパネルラと共に銀河を走る鉄道で旅をしたのちひとり地上に帰還し、先程まで一緒にいた筈のカムパネルラの死を知らされるといふものである。銀河鉄道には死者を天上に運ぶ役割があることが作中徐々に種明かしされ、乗客の中にはおそらくタイタニック号の犠牲者をモデルにしたと思われる者も登場する。幻想的な宇宙空間を舞台に死者と交流するこの物語は、胸躍る風景に限りなく透明な美しさを湛えると同時に不安や焦燥、悲しみを滲ませ、主人公ジョバンニが「みんなのほんたうのさいはい」への祈りを抱くに至るまで、畳み掛けるように展開していく。この物語は賢治のそれまでの創作とは大きく性格を異にしている。『銀河鉄道の夜』以前に殺生を描いた作品は皆殺生戒を念頭におき殺生を戒めるようなものであったが、『銀河鉄道の夜』において鳥を捕る「鳥捕り」という人物は罰されることも絶命することもなく鳥を捕り続けている。またこの作品は『ひかりの素足』や「手紙四」等の作品と異なり、一見して仏教色が薄く、仏教的な教示であると即座に読み取れるような描写は為されていない。

『銀河鉄道の夜』に提出された「みんなのほんたうのさいはい」を希求する姿勢は、先に挙げた「手紙四」において「あるひと」が妹を喪つたチユンセに向けて語つたことを継承するものであるように見受けられる。しかしこの物語は一九二四年から一九三一年まで夥しい改稿を繰り返しながら、未完、未発表に終わって

しまう。その理由は、法華信仰を突き詰めることと、他者の幸福を願い実現することの両立の困難に行き当たったゆえであるように見受けられる。

『銀河鉄道の夜』には様々な登場人物が配されている。特に印象的なのは先に挙げた鳥捕りと、クリスチャンと思しき家庭教師の青年、及びその教え子である姉弟である。主人公ジョバンニは鳥捕りに対して突如「この人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいい」「二一・二五〇」と思うようになる。しかしその後には鳥捕りは姿を消してしまふ。またジョバンニは家庭教師の青年たちと「ほんたうのかみさま」について論争を行う「二一・一六五」。共通認識に至れないまま家庭教師たちは「ハルレヤハルレヤ」の響く「サウザンクロス」「二一・一六五」で下車し、ジョバンニはそれを悲しみながら見送る。

主人公ジョバンニを賢治の分身とするなら、鳥捕りと家庭教師の青年たちは賢治にとって受け入れ難い他者として造形されていると考えられる。鳥捕りは殺生を行う者である。家庭教師の青年たちは他宗教を信仰する者である。どちらも法華の行者である賢治にとって、非常に受け入れ難い性格を持つものであるといえる。そしてジョバンニは受け入れ難い他者である鳥捕りのほんたうの幸を祈る。またクリスチャンと思しき家庭教師たちとは論争を行うが、この論争は目前にせまったサウザンクロスでの別離を

回避したい、共通認識を抱くに至りたいという切実な願いのあらわれとして描写されている。立場の異なるゆえに折り合うことの難しい他者とも折り合いたい、共にありたい、共に幸福になりたいたいという希求のあらわれであるかのような描写である。

『銀河鉄道の夜』は一見して仏教色がうすい作品である。しかし主人公ジョバンニの切符が十界曼荼羅を思わせるものであることは既に正木晃等に指摘されている⁽¹⁾。この切符は他の乗客が所持しているものとは異なり、「おかしな十ばかりの字を印刷したもの」「二一・一四九〜一五〇」である。これは日蓮がその晩年に法華信仰の本尊としてさかんに書き遺した曼荼羅の特徴と合致する。そしてこの切符は「ほんたうの天上にだつて行ける」「二一・一五〇」どこまでも行ける「二一・一五〇」ものだとされ、明らかに他の乗客の切符より上位に置かれているのである。主人公ジョバンニがそれを所持していたことは、この『銀河鉄道の夜』において賢治が自身の信仰を表明した証左であるといえる。ジョバンニが鳥捕りとすれ違い、家庭教師たちと悲しみながら別離するのは、ジョバンニが法華の行者として描写されたゆえなのである。

しかし自らの信仰を強く保持するがゆえに他者と別離に至るのは、賢治が望んだ結末ではなかったと思われる。賢治が『手紙四』で述べた決意は「すべてのいきものほんたうの幸福」である。『銀河鉄道の夜』においても、ジョバンニは最終的に別離に

至る他の乗客について、彼らの幸福を願ひ、また共通認識を抱くという足掻きを見せる。その姿勢は畢竟、折り合うことの非常に困難な他者の幸福をも願うものであろう。

留意すべきは『銀河鉄道の夜』には複数の自己犠牲が描かれている点である。主人公ジョバンニの親友カムパネルラは級友を助ける為に川に飛び込んで溺死している。家庭教師の青年たちは救命ボートの収容人数の限界を悟り、他者の生存を願って溺死を選ぶ。また家庭教師の教え子である少女が語る「蠅の火」という挿話がある。イタチの捕食から逃げ惑ひ井戸に落ちて落命する蠅が、「どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れやならなかったらう。(中略)どうか神さま。わたしの心をこらんと下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことみんなの幸のためにわたしのからだをおつかひ下さい」「一・一六三」と祈り、星に生まれ変わってそのからだを燃やし続けるという物語が、非常に印象的に挿入されている。

これらの自己犠牲のエピソードはジョバンニが中盤に突如として鳥捕りの「ほんたうの幸」を祈り、また結末付近で「僕はもう(中略)ほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまはない。」という決意を抱くに至る為の契機として仕掛けられているように見受けられる。作中におけるジョバンニの他者との交流は、彼が隠された法華の行者として描写されるゆえにすべて別離へと至る。しかし各々の立場の違いを超え

て至りうる「みんなのほんたうのさいはい」を希求する決意、及びそれへの契機として自己犠牲を描いていることが読み取れるのである。

次節では賢治が『銀河鉄道の夜』以降、最晩年に執筆した作品である二作品を検討することで、賢治が創作を通じて表わそうとした最終的な境地を探る。

五、グスコンブドリからグスコーフドリへ

本稿はこれまで賢治に萌芽した衆生救済意識が国柱会との接触によって創作と結びつき、智字への傾倒によって信仰に基づいた規範の提示による教化を志向するようになった過程を追い、更に実生活上での苦悩を経て創作の性格を転換しようと試みるに至るまでを考察した。

先に考察したように、『銀河鉄道の夜』における主人公ジョバンニと他の乗客の交流は、すべてすれ違いや別離に終わっている。しかし単純な規範の提示としての創作ではなく、他者の多様性を踏まえた上で「みんなのほんたうのさいはい」を希求するという展開を構想していたことは注目に値する。作者である賢治自身が改宗問題及び人間関係に苦悩し続ける中で編まれたこの物語は、賢治が折伏主義を脱し、それまでの仏教理解に基づいた規範の提示を志向する創作を超えた理想として「みんなのほんたうのさい

はい」を描写しようとした試みを反映するものである。賢治が『銀河鉄道の夜』においてそれまでの創作における教化を志向する性格を脱しようと試みていたことは、最終的な改稿を行ったのと同時期である一九三二年頃に、先に挙げた「断ジテ／教化ノ考タルベカラズ！」の書き込みがなされていることもその証左であるといえる。

しかし『銀河鉄道の夜』は生前未発表、未完のまま残された。その賢治の最終的な見解を探る為に、彼の没する前年である一九三二年に発表された『グスコープドリの伝記』という童話を手掛かりに考察する。これは一九三二年頃までに初稿が成立した『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』をその最初期形とする。そこから幾つかのモチーフを継承し、一九三二年までに『グスコープドリの伝記』が成立する。それとほぼ同じ内容を持つが、主人公の性格等に幾らかの改変を加えたものが発表形式である『グスコープドリの伝記』である。一九三一年以降手入れが行われず未完未発表のままであった『銀河鉄道の夜』に比べ、それ以降に執筆され、また発表された『グスコープドリの伝記』からは、賢治が『銀河鉄道の夜』以降に目指そうとした境地を探ることが可能である。なお『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』は成立が一九二二年と賢治の創作の初期にあたること、また「ばけもの世界」という架空の世界を舞台としたユーモラスな筋書は、飢饉による冷害に立ち向かい命を落とす主人公を描いた『グスコンプド

リの伝記』や『グスコープドリの伝記』とは大きく性格を異にする為、ここでは考察の対象としない。

『グスコンプドリの伝記』及び『グスコープドリの伝記』は共に、冷害による飢饉に立ち向かった主人公ブドリの一生を描いている。ブドリは冷害による飢饉により幼少期に一家離散し、その後火山の噴火により職と住む場所をも失う。そのうち農家に拾われ働きながら勉学に励み、やがて火山局に勤めるようになる。そして予測された冷害とそれによる飢饉を回避する為に、気候を改善する計画を立てる。それは空気中のガスを増やす為に火山を爆発させるものであった。その計画の遂行の為に、ブドリは一人火山に残り、命を落とすのである。これらおおまかな展開はそのままに、何故更なる改稿が必要とされたのだろうか。

『グスコンプドリの伝記』と『グスコープドリの伝記』を比較した先行研究では管見の限り工藤哲夫のものが綿密である。工藤はグスコンプドリのもっていた英雄願望を戒める為に改稿が行われたという推測を示し⁽¹²⁾、また別稿で賢治が田中智字の「不惜身命」の影響を受けていた可能性を指摘している⁽¹³⁾。工藤説を踏まえた上で改稿の理由を探る為、まず以下に智字が不惜身命について述べているものを引用する。

「聖愚問答鈔」に出づ。「法華經」譬喻品の偈の文。法の爲に身命を惜しまずといふこと。凡夫の至極の信仰にして、い

はゆる命にまさるものなければ、之を供養するは戀法の至なれば也。法華經の信とは是れ也。「法華經」提婆達多品の『不惜軀命』、勸持品の『我不愛身命但惜無上道』、如來壽量品の『一心欲見佛不自惜命』の諸文と今の文とは法華經の行者の眼目也。『不惜身命』に事と理との別あること「御義口傳」勸持品十三箇の大事の第二に示されてあり⁽¹⁴⁾。

ここで示されているようにこの語の出自は法華經であり、智学はこれを「法華經の行者の眼目也」と提示する。賢治がこれを読み、教への為に命を落とす主人公の物語を着想したとしても不思議はない。工藤が指摘するように、『グスコンブドリの伝記』は田中智学の「不惜身命」をあらわし、称揚する性格を持っているといえる。では改稿が行われた理由は何か。その検証の為、以下に田中智学が「身輕法重」という語について述べているものを引用する。

斯くの如く常によく吾身を輕しとし、大法を重しとしとして、吾が身の慾を破し執を離れて居て萬一の時は何時でも身を捨て、法を護るの覺悟が立つて居るときは、この身は常に常に法に一如して居るのである、すでにこれ先天的煩惱の身ではなく、後天的に法の身である、我身即ち法の活現、法即ち我身の魂魄となるのである、是においてか此の我身なるも

のが、また無上の価値を出して来て、我が身でない、法の身であるから、疎末にすることは出来ない、自己の執着や欲想の爲めに、聊かでも吾が身を損ずれば、法の爲の身を損じて、法を弘め得ぬことになるから、その罪や重大である、所謂元政が『無上道を惜しむが故に此の身を惜む』といったのは乃點だ、法は重く身は輕しだから、法の爲なら早く捨てよとあつても捨つるべきではない時に捨て、はならない、『捨つべき場合に捨て、捨つべからざる場合に捨てず』一ら祖教によりて進退を処す、これを身輕法重といふ。

されば涅槃經にも『假使へバ王使ノ善ク談論シ、命ヲ他ノ國ニ奉ズルニ、寧ロ身命ヲ失ウトモ、王ノ所説ノ言教ヲ匿サザルガ如シ』の釋を、章安が『身ハ輕ク法ハ重シ、身を死コシテ法ヲ弘メヨ』といはれたので、大聖人は諸種の例を引かれた中に、『身の肉をほしがらざる時に肉を與ふべきや、紙ある世に身の皮を剥ぐべしや』と仰せられた、たゞ身は輕しだからとて、無暗に身を死したがる事は要らない、むしろ謗法である、常に法の爲には身を捨つるの覺悟を以て、法の爲めに自らの身を疎末にせず、常に常に法に盡すのを身輕法重といふのである⁽¹⁵⁾。

不惜身命の語は法の為、つまり法華經の受持の爲の自己犠牲を奨励するものである。しかし「大法を重しと」する「身輕法重」

の語において、無暗に命を捨ててはならないことが示されている。これらを踏まえた上で、『グスコンプドリの伝記』と『グスコンプドリの伝記』の相違点を検証する。

両作品の最も大きな違いは主人公の言動にある。グスコンプド리는「とにかくほんたうに役に立つ仕事なら命も何もいりませんから働きたいんです」「一一・四九」「ほんたうになければならぬ命を捨てることを厭わない旨を積極的の何度も口に出す。対するグスコンプド리는、グスコンプド리가上記の台詞を述べる箇所に対応する箇所において「仕事をみつげに来たんです」「一二・二一六」と述べるのみである。

またブドリが火山の爆発の為に命を落としたあとの描写も大きく異なっている。以下にグスコンプドリの死後の描写を引用する。

ブドリはみんなを船で帰してしまつてじぶんが一人島に残りました。

それから三日の後イーハトーブの人たちはそらがへんに濁つて青ぞらは緑いろになり月も日も血のいろになったのを見ました。

みんなはブドリのために喪章をつけた旗を軒ごとに立てました。そしてそれから三四日の後だんだん暖くなつてきて

たうたう普通の作柄のトシになりました。ちやうどこのお話のはじまりのやうになる筈のたくさんのブドリのお父さんやお母さんたちはたくさんのブドリやネリといっしょにその冬を明るい薪と暖い食物で暮すことができたのです。

「一一・六八」

それに対し『グスコンプドリの伝記』における上記相当箇所は以下のように改められている。

すつかり支度が出来ると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そして次の日、イーハトーブの人たちは、青そらが緑いろに濁り、日や月が銅いろになつたのを見ました。けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖くなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖いたべものと、明るい薪で楽しく暮すことができたのです。 「一二・二一九」

改稿により、主人公が積極的に命を捨てたことに焦点を合わせた。結末の描写が、主人公が命を捨てたことを最早明示せず、その結

果として皆がどうなったかのみを描写するものへと改められたことが分かる。グスコンブドリはその自己犠牲により英雄視され皆にその死を悼まれるが、グスコープドリにはそのような展開は用意されていない。この改稿からは皆の為の自己犠牲、即ちある種の不借身命の称揚が行われなくなったことが読み取れる。

グスコンブドリはフアナティックな自己犠牲願望を前面に押し出している。これは「みんなのほんたうのさいはい」を求めると決意した『銀河鉄道の夜』の主人公ジョバンニの性格を継承するものであるように見受けられる。しかし智学を通じて法華経理解をより正しく表現出来ているのは、改稿後のグスコープドリであるように見受けられる。何故ならば無暗に命を捨てることは智学自身によつて戒められているからである。グスコンブドリに比べ控えて冷静な態度を取るグスコープドリは、その発言において命を投げ出すことを前面に押し出さない。『グスコープドリの伝記』作中を通して重視されるのはブドリが皆にどう受け入れられたかではなく、ブドリのやり遂げた仕事に皆に何をもちたかなのである。『グスコンブドリの伝記』から『グスコープドリの伝記』への改稿は、物語の主題をフアナティックな不借身命志向からより現実の皆の問題に即した仕事の遂行と、それによる皆の幸福の実現へと変化させているといえる。

賢治は不借身命に対する理解を、身軽法重の語を重ねることによつて更新し、それゆえに教えをより正確に反映する意図のもと

改稿を行ったのではないか。不借身命をまずは自己犠牲を称揚するものとして捉えまたあらわしたが、次に無暗に命を棄てることを良しとしない智学の言説に触れ、それを改めようとしたと解釈出来るのである。

『グスコープドリの伝記』はまた、皆の多様な在りようを捉えようと試みながら「みんなのほんたうのさいはい」を求めようとする、『銀河鉄道の夜』に萌芽した理想を引き継ぐものであるようにも見受けられる。この作品にはブドリの家を無断で工場にしてしまつたり、ブドリを誤解して一方的に暴行を加えるような、折り合うことの非常に困難な他者が幾人も登場する。しかしブドリはそれらの人々を含むすべてのイーハトーブの人々を守る為に命を落とすのである。

法華経の教えを広める為のそれまでの創作の枠組みに収めることが出来なかった「みんなのほんたうのさいはい」を、法華経の教えを正しく表現することによつて達成しようとした『グスコープドリの伝記』は、『銀河鉄道の夜』において二つの理想に引き裂かれた賢治が、それらを同時に実現するものとして生み出したのであろう。賢治はこの作品にこそ自身の境地をあらわせたと思つたのではないか。それゆえ『グスコープドリの伝記』は数少ない生前発表作品となつたのであろう。

賢治の生涯がその最晩年まで法華信仰に彩られていたことは、彼が最晩年に使用していた『雨ニモマケズ手帳』にも明らかであ

る。この手帳の殆どのページは経文からの抜書きで埋め尽くされているのである。

賢治が創作において志向した衆生救済とは、ある時期までは信仰に基づいた規範の提示である。しかし賢治が実生活において両親を改宗させることが叶わず、また親友であった保阪嘉内とも信仰を巡って訣別に至ったことなどから、賢治は皆に自分と同じ信仰を望むことの困難を痛感した筈である。また殺生戒に纏わる創作を重ねるうちにその順守が究極的には生存と対立することのジレンマに至ったことで、作品の構造もより複雑化していった。そして妹トシの死を契機に死者の追善を行うことが出来なかった賢治は、自身の信仰がより確かなものになるよう苦悩しながら、賢治にとって信仰と等しかった「みんなのほんたうのさいはい」、すなわち衆生救済のかたちを希求する創作として『銀河鉄道の夜』を執筆したのである。

賢治はおそらく、祈りまた願い希求して已まない「みんなのほんたうのさいはい」が、皆がそのまま共に抱けるもの、共に在れる場所を措定することであると『銀河鉄道の夜』執筆により気付きかけたのであろう。しかし賢治が早い段階で法華経に出会い国柱会に傾倒していたために、信仰に基づいた規範の提示としての創作に行き詰りを感じてなお、皆が法華経を信奉することをその至るべき理想として措定しようとする苦悩が『銀河鉄道の夜』を未完・未発表のままにさせ、更に『グスコブドリの

伝記』と『グスコブドリの伝記』という性格の異なる二人の主人公の物語を生み出したのである。

賢治は手帳に「断じて教化ノ考タルベカラズ！」と書き付けたのち、「タダ純粹ニノ法樂スベシ」とも連ねている。教化を意図せず、しかも純粹な信仰のあらわれとしての創作とは賢治にとって一体どのようなものであったのだろうか。それは最早、教化の意図といった次元を超えたところに、希求すべきものを見出していたことをあらわすのではないだろうか。

賢治が生涯をかけて希求した「衆生救済」の衆生とは、『銀河鉄道の夜』における登場人物の造形などを鑑みるに、分かり合えなさや共にいられないことをどこか予期した上で、それでもなお希求せずにいられない他者を指す。それゆえ賢治の創作は、規範の提示としての性格を持っていた時期ののちに登場人物の在り様を受容しようという願いを反映したものとなり、更に分かり合えずとも皆が共に幸福になれる未来を祈るものとなる。確かな教義理解と、他者を受容した上でその幸福を祈ることが両立する『グスコブドリの伝記』が、その最晩年の境地をあらわしている。

賢治自身の祈りの言葉によって紡がれる作品世界は、祈ることが顕現せしめることそのままであるかのように構築される。そうして生み出された作品世界は賢治にとっての理想郷の性格を持つ。賢治にとって信仰と同義であった「衆生救済」が、日常的に

は捉えられない次元で初めて実を結ぶことに望みを繋ぐ営みこそが、彼にとつての創作であつたといえる。そしてその理想に至る為の重要な契機として、智学を通じて法華経理解を踏まえた上で、自己犠牲のかたちを描き出したのである。

※本稿における宮沢賢治の引用は全て『新』校本宮澤賢治全集』(筑摩書房、一九九六～二〇〇九)に依る。引用の最後には『巻数・頁数』を表記する。

註

- (1) 元日蓮宗僧侶・田中智学によって創設された法華宗系在家仏教団体。一八八〇年に結成した蓮華会を端緒とし、幾度かの改名を経て一九一四年から国柱会を名乗る。
- (2) 伊藤博之校注『歎異抄 三帖和贊』新潮社、一九八一年、一二頁。
- (3) 青江舜二郎『宮沢賢治』講談社、一九七四年、六七頁。
- (4) 吳善華『宮沢賢治 彷徨する魂』東海大学出版会、二〇〇〇年、三三～三四頁。
- (5) 上田哲『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院、一九八八年、六一～六四頁。
- (6) 上田前掲書、二〇～二二頁。
- (7) この一文は賢治の没後発見された手帳に書き付けられていたものである。「雨ニモマケズ」が書き付けられていたことから『雨

ニモマケズ手帳』と呼ばれるこの手帳は、一九三二年一〇月から一九三一年末か一九三二年初めまで使用されたことが特定されている。その為この一文も一九三二年一〇月以降に書かれたことが分かる。

- (8) 高知尾智耀「宮沢賢治の思い出」『真世界』真世界社、一九六七年、二八～二九頁。
- (9) 田中智学講述『日蓮主義教学大観第一巻』国書刊行会、一九七四年、六八～六九頁。
- (10) 森山一『宮沢賢治の詩と宗教』真世界社、一九七八年、一五五頁。
- (11) 正木晃「なぜ、宮沢賢治は浄土真宗から日蓮宗へ改宗したのか？」『宮沢賢治の深層―宗教からの照射―』法蔵館、二〇一二年、二二～二二頁。
- (12) 工藤哲夫『賢治論考』和泉書院、一九九五年、四一～五八頁。
- (13) 工藤哲夫『賢治考証』和泉書院、二〇一〇年、一七四～一七八頁。
- (14) 田中智学監修『普及版大辞林下巻』国書刊行会、一九二一年、二七六一頁。
- (15) 田中智学講述『妙宗式目講義録』師子王文庫、一九一七年、三二二～三二二頁。

(まきの・しずか 筑波大学大学院)

人文社会科学研究所)